里山を復活させる森林整備

小海町のカラマツ林。地面まで明るくなりました。

ご近所や通勤通学途中に見える山林で、森林の木が倒されていたり、薄暗かった森林に日の光が差し込むようになったのをご覧になったことはありますか。

木は成長しながら枝を広げ、葉を増やします。葉で光合成を行い、養分を幹に蓄えます。また、木は一般に梢（枝の先端）の真下まで根を張っているとされています。

混み過ぎると木一本ごとの葉が増えず、光合成により幹を太らすことができなくなります。長細い幹になり、風雨や雪に倒れやすい木になります。また、枝を伸ばせないため根を広く張れず、やはり風や雪で倒れやすくなります。

さらに、暗い林内では地面に草が生えづらくなって、森林のやわらかな土が雨に流されやすくなり、水を蓄える働きも弱くなります。

そこで木を間引く「間伐」で木と木の間隔を開けることで木を太らせ、根を張らせて地面に日光が入るようにしているのです。